

## 幼児造形指導者養成のためのカリキュラム研究 —子どもの造形活動を追体験するために—

関崎 哲

Curriculum research for infant forming leader training  
-to relive the child's forming activity-

Satoshi Sekizaki

### 要約

今日の子どもたちの抱える表現力やコミュニケーション力不足という問題は、そのまま幼児造形指導者を目指す学生たちに反映されていると見ることができる。本論ではこのような問題の原因として、表現するための造形活動体験の不足や、造形表現過程での試行錯誤してもものを作り上げていく活動経験の不足があると考え、将来、幼児造形指導者を目指す学生達に向けた問題解決のためのカリキュラムモデルを作成し、実施して検討を加えようとするものである。

本学の造形関係の授業の中で「子どもの造形活動を追体験する」ということを念頭に、①表現のための動機の発見、②制作のための資料収集、③表現形態と手法の検討、④作品の鑑賞、といった具体的な制作の段階を意識的に経験させる活動を行った。このような活動を経験することで得られた成果は、活動に取り組む学生が意識の中に「子どもの造形活動を追体験する」という視点と、「子どもたちが抱える造形表現に関わる問題を、学生本人が同じように持っていることを自覚し活動に取り組む」という2つの視点を持つようになったことである。実際に子どもの造形活動を支援していく上で、このような視点を持ちながら、様々な造形活動を経験することが、実効性のある援助力を身につけていくことに繋がって行くことになると考えられる。

キーワード：造形表現、幼児造形、動物オブジェ

### 1.はじめに

子どもたちの造形活動を指導していく場合に大切なことは、その活動をしている子どもたち自身がどのようなイメージを頭の中に描き、それに向かってどのような方法を選択し活動しているのかを理解することである。そして、指導者が接しているその時点で、その子ども本人がどの程度の達成感を得ているのかということを理解することが、さらに大切なことのように思う。しかし、子どもたちの造形活動を指導していく者を養成していく中で、このような力を身につけさせるのは、はなはだ困難な状況にある。たとえば、本学の造形関連の授業の中で造形活動に取り組む学生の様子

をみるかぎり、指導者を目指す学生自身が、「表現したいことをイメージする力」や「そのイメージを、現実に形を持ったものにしていく力」を十分に持っているとは言いがたいという現実がある。さらに、そうした問題を学生自身が自分の持つ問題として、造形活動中に意識することができない者が多いということもあげられる。これはまさに、学生本人の造形活動の経験不足からくる問題であり、それは、今日の子どもたちの抱える表現力やコミュニケーション力不足という問題がそのまま学生たちに反映されていると見ることができる。

本研究では、このような現状を踏まえ、幼児造形の場合での適切な援助力を養成する為に何が必要で、どのような取り組みが可能なのか考察するとともに、問題解決のためのカリキュラムモデルを作成し、実施して検討を加えようとするものである。

## 2.子どもの造形活動を追体験する意義

先に述べたように、幼児造形指導者を目指す学生たちにとっての問題は、造形活動の実体験、特に“造形遊び”以降の“表現すること”を主体とした活動の経験が少ないことである。つまりそれは、表現するために試行錯誤を繰り返し、少しずつでも自分のイメージしたものへ自分が作っているものが近づいていくということに楽しみを見いだす、という経験が少ないということではないだろうか。本学のように美術専門ではなく、総合的に保育を学びながら造形活動を指導していく力を身につけて行く必要のある学生にとって、造形活動をたくさん経験し、造形のための技術的な習熟度を上げていくことは大変困難なことである。そのことを踏まえながら、幼児造形指導者を目指す学生達が適切な援助力を身につけて行くためには、この研究で試みようとしている「子どもの造形活動を追体験する」ということが効率的であり有効な方法なのではないかと考えたのである。

幼児造形の分野においては、活動の結果としての「作品」中心の評価ではなく、造形活動の過程をよく見て、活動の過程そのものを評価していくことが重要であると言われており、その意味でも、実際の子どもたちの活動をシュミレーションしながら、自分たち自身の造形活動を体験するような活動が重要になってくると思われるのである。

実際の子どもたちの活動をシュミレーションしながら、自分たち自身の造形活動を体験することによって、自分たちが活動の中で直面する問題が、そのまま子どもたちが活動の中で直面する問題であると理解することが可能になり、そしてそのような問題を解決しようと学生自身が取り組み、造形活動を行っていくことが、実際に子どもの造形活動を支援していく上で実効性のある援助力を身につけていくことになるのではないだろうか。自分自身が造形表現の過程で抵抗があると感じたもの、楽しいと感じたこと、また工夫や試行錯誤によって達成できた表現をその過程を通して理解することで、子どもの造形の現場に直面した場合に、自分の経験と照らし合わせ、適切な援助方法を選択していくことができるようになるのである。そのために、決して多くない造形活動の機会の中で、効率よく適切な援助ができる力を養うために、意識的に子どもの造形活動を追体験させる課題や方法を盛り込むことが意義のあることなのである。

### 3.造形物で表現するための思考と実活動の関係

一般に、我々が造形物によって他者に何らかの思いを伝えようとする場合、まず外界からの刺激による何らかの心の変化が表現するための出発点となる。この感覚はいわゆる感動と呼ばれるプラスイメージの心の動きのみではなく、マイナスイメージ、つまり、悲しみ、嫌悪と言った感情も含まれる。そして、表現のための出発点が確認できたら次はその感覚を表現物として現実の形にしていく具体的な活動に移る。大人の場合は、それまでの幾たびかの表現経験を通して自分自身の趣味趣向が確立されており、そうした自分自身の感覚に合った表現方法を選択し、造形活動を進めて行く。また、実際にものを作り出すときの自分自身の技術的な限界、つまり造形的力量もある程度自覚でいっているので現実の制作物と頭の中に描いたイメージの間で折り合いをつけながら、完成作に至るといった過程をたどる。自分の頭の中の表現したいもののイメージと実際の造形活動によって目の前に現れてくるものとの間のギャップに挫折感を味わったり、イメージ通りとは行かないまでもそれと近いものが出来上がることに満足感を覚えたりすることを繰り返しながら、表現は深まり、表現物を通したコミュニケーション力も養われて行くのである。このように、十分に表現経験を持っている大人の場合は、それほど援助を必要とせず、表現に至る試行錯誤を半ば楽しむような形で表現活動を行うことが可能である。しかし、子どもたちの場合はまだ生活経験も足りないし、表現活動の経験も少ない。そのため子どもたちは、自分の思いが自分の作った表現物であらわしきれていないことに不満を感じたり、挫折感を味わったりすることになる。周りの大人たちや指導者による様々な形の援助は、まさにこの時に必要とされ、そうしたときの適切な援助によって表現やコミュニケーションの喜びが子どもたちの心の中にもたらされ、主体的な表現意欲が育てられて行くのである。

さて、今回本論で考える「子どもの造形活動を追体験する」造形活動は、「動物オブジェ」をつくることを課題としたものである。この課題自体は、ここ数年来取り組んでいる課題であるが、課題に取り組み始めた当初は、立体表現手法の習得を目指す活動の一つとして取り組んだ課題にすぎなかった。しかし、平成10年頃からこの課題に取り組む学生の様子に気になる点が見られるようになってきた。課題に取り組む学生の中に、全くと言ってよいほど課題に興味を示さず投げやりな作品を提出してくる者、あるいは、作例として示したものと殆ど同じものを作る者が見られるようになってきたのである。特に目を引いたのは、実際の活動に入れない者の存在である。よく話を聞くと、どうも彼らの頭の中には、相当完成度の高い作品がイメージとして出来上がっているらしい。ところが、いざ実際に自分の手を動かし、ものを操りながら実活動の作業に入ろうとすると、実現しようとしているイメージに自分の造形的力量が追いつかないことわかってしまうのだと言う。いったんそうなると、いかに表現したいイメージで頭がいっぱいになっていても、実際の制作には繋がっていかなくなってしまふ、ということらしい。これではまるで、将来子ども達の指導に回る対場にいる人たちは、前に述べたような子ども達に必要とされる援助がそのまま必要な者であるということになりはしないだろうか。自分の頭の中の表現したいもののイメージはある。しかし、そのイメージと実際の造形活動によって目の前に現れてくるものと如何に折り合いをつけその時点でベスト

な表現を形作って行くという大人の活動ができないのである。言はば、造形物で表現するための思考と実活動の関係がかけ離れ、それをつなぐ手だてが見いだせないままここに至っているのである。

#### 4.子どもの造形活動を追体験するためのカリキュラムモデルと実施報告

これまで見てきたような造形活動の過程に見られる問題を、いかに解決していくことができるのか、ここ数年の大学の造形関係の授業の中で「子どもの造形活動を追体験する」ということを念頭に試みてきた成果をここで報告しようと思う。

制作する課題は、「動物オブジェ」で、10センチ角の立方体の角材を配布し、そこにクレイ粘土を用いた立体的な形態をレイアウトし作品化するというものである。

表1は、そのために平成16年に作成したカリキュラムモデルである。このカリキュラムモデルにより、平成18年までの3年間にわたり、この課題制作を実施してきた。前にも触れたが、これ以前

にも「動物オブジェの制作」として実際に動物園に出向き、スケッチをしたうえで粘土を使った立体を作るという課題制作は行っていた。その当時の課題の主なねらいは、表現対象としての動物を知ることと制作のための素材としての粘土を経験することであった。カリキュラムモデル作成以降は、課題制作のねらいを“子どもの造形活動を追体験する”こととし、①表現のための動機の発見、②制作のための資料収集、③表現形態と手法の検討、④作品の鑑賞、といった具体的な制作の段階を意識的に経験させることを念頭に置いたものとなっている。

実際の授業では、まず学生に表2のようなワークシートを配布し、課題「動物オブジェの制作」の導入を行う。この導入の際に重要なことは、学生に対して明確な形でこの課題制作のねらいと内容を伝えることである。幾つかの作例と、子ども達の表現活動の内面的な流れを解説しながら、具体的にこの課題制作で体験してほしいこと、つまり、①実際に動物を見て発見や感動を確認すること（表現のための動機の発見）、②動物をスケッチしたり図鑑等にあたりながら対象に対する理解を深めること（制作のための資料収集）、③そしてその対象から得た心の動きを伝えるために自分の造形的力量を考慮しながら、どのような作品形態や手法が適しているか考えること（表現形態と手法の検討）、④お互いの作品を鑑賞しながら様々な表現動機や手法があることを知ること（作品

表1 子どもの造形活動を追体験するためのカリキュラムの流れ

	時間・場所	ねらいと活動内容
導入	第1週 造形教室	ねらい：造形表現するための必要条件の理解 ・表現の出発点となる発見と感動の重要性を考える ・表現するための素材と手法について考える
制作の準備①	第2週 学外 池田動物園	ねらい：表現内容と表現方法の関係を理解する ・実際の動物に触れ、スケッチを行い表現したいことを見つける ・ワークシートを利用し、表現したいことが伝わる作品の表現方法を考える
制作の準備②	第3週 造形教室	ねらい：実制作を想定した、造形思考を経験する ・完成予想図とそのための芯構造の図とを比べ、表現したいことが伝わる作品であるか、自分の造形的力量で制作可能かどうか検討する
制作①	第4週 造形教室	(制作) 動物オブジェ制作のための芯作り ・完成を十分イメージしながら、芯の太さ大きさ方向を決め固定していく
制作②	第5・6週 造形教室	(制作) 粘土での制作と仕上げ ・表現内容と表現方法を十分意識しながら制作する
鑑賞	第7週 造形教室	(鑑賞) ・作品を表現内容と表現方法の観点から鑑賞する ・個性的な表現を制作過程やその製作中の造形思考を推測しながら考えてみる

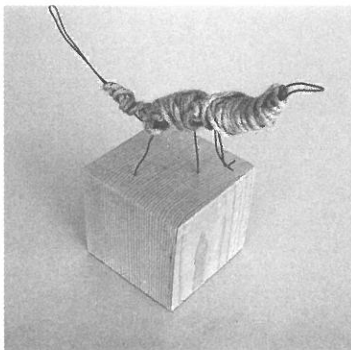
の鑑賞)を伝える。

特に“②表現形態と手法の検討”の段階については、参考作品を示しながら、自分の造形的力量を考慮したうえで、対象を具象的に表現するのか抽象化して表現するのか、また制作のために与えられた“10センチ角の角材”＝“立方体”をどのように利用していくのか、について十分な説明を行う。具体的には、自分自身が粘土を用いた制作経験が十分にあり表現技術を持っていると判断した学生は具象的な表現方法をとることになるだろうし、そうした点に自信のない学生は対象の特徴を理解したうえでその特徴が十分現れるという条件のもと抽象的な表現を試みるという方法もあるということを示す。また、与えられた“立方体”を作品の台座として用いるか、あるいはその立方体をブラックボックスに見立て、自分の造形的力量を考慮して表現困難な部分はその中に隠してしまうという表現手法

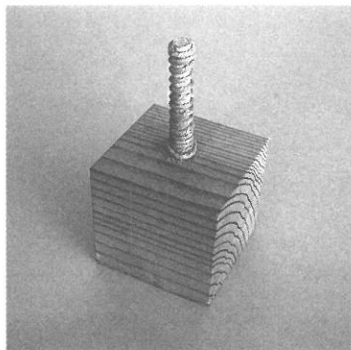
もあり得るということも示す。実際に学生には、写真①から③のような3つのパターン、粘土付け前の“芯”の状態の見本を学生に提示する。①は立方体を台座として扱う場合の芯の状態。②は立方体から立ち上がるように立体を表現する場合、③は立方体に対して立体が張り付くような粘土の付け方をする場合の芯の状態である。②と③の方法を用いれば動物のある部分を制作するだけで、それ以外の制作困難な部分を立方体の中にイメージとして仕舞い込むことが可能になり、自分の造

表2 配布したワークシート

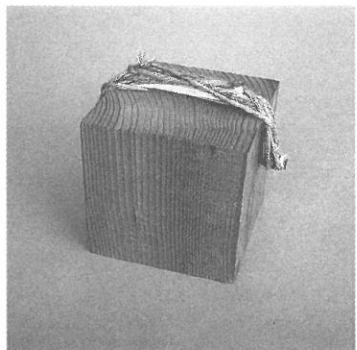
園エワークシート	
番号 _____ 氏名 _____	
課題：立体表現（動物オブジェを作る）	
<ul style="list-style-type: none"> <li>・制作のための資料収集と、表現内容・表現方法の検討</li> <li>・制作</li> </ul>	
制作手順：(1)制作のための資料収集	
<ul style="list-style-type: none"> <li>・動物園でのスケッチおよび博物館、図鑑等の利用</li> </ul>	
(2)表現内容と表現方法の検討	
<ul style="list-style-type: none"> <li>・表現内容（美しさ、かわいらしさ、不思議さ、恐ろしさ）</li> <li>・表現方法（部分、全体）（具象、抽象）</li> <li>・構成（角材へのレイアウト）方法（台座、ブラックボックス）</li> </ul>	
(3)制作（芯作りと粘土付け）	
制作の対象： _____	
選定の理由と制作のねらい： _____	
_____	
エスキース1	エスキース2
自己評価： _____	



写真①



写真②



写真③

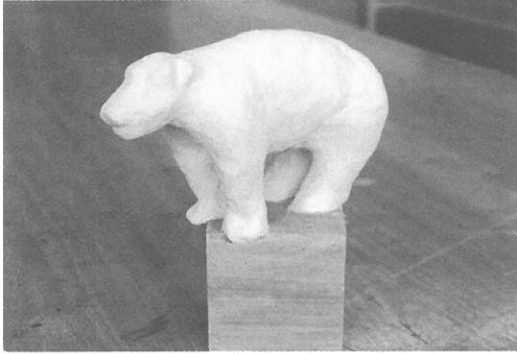
形的力量に不安を持つ学生にとっては、作品制作を進めて行く上での不安から解放されるということが考えられる。

ワークシートと幾つかの作例によるガイダンス内容をしっかり理解したか確認した上で、活動は表1の「制作の準備①」に移って行く。ここでは、実際に感動や発見といった表現の出発点を見つけるために動物園に出かけスケッチする。造形物で表現するためには、その出発点となる感動や発見がなければならない。そして、それがあって初めて自分が思い描いたイメージを表現するための方法を工夫して行く段階に入って行けるのである。この段階では、実際に動物を見たりスケッチをしたりしながらワークシートに示されている幾つかの手法を参考にし、自分の造形的力量を考慮して自分が表現したいものに最も合った表現手法を考えて行く。この際、注意しなくてはならないのは、自分の造形的力量を考慮し表現手法を考えて行く活動が“消極的”な活動ではなく、自分らしい表現のための手法を考える、あるいは自分にとって実現可能な「実際に人に見てもらえるもの」を作り出すための“積極的”な活動であるということを理解させることである。作品制作のための継続する活動が主体的で自信に満ちた活動となるためには、表現しようとしている者がこうした考えを持つようになることが重要である。このように動物園では、表現のための動機の発見をし、制作のための資料収集をおこない、表現形態手法の検討をする。最終的に動物たちが目の前にいる段階で、ワークシートのエスキースの欄に、完成予想図、完成予想図を透視するようにして粘土をつけるための芯のイメージを描いておく。

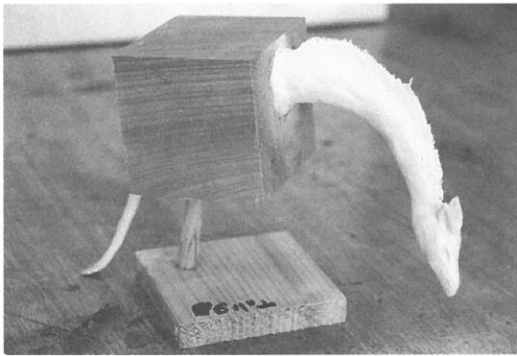
教室に帰ってからワークシートに記述した内容の再検討を行ったあと、芯を造り実制作に取りかかる。制作が進んで行く過程で、自分の表現意図が曖昧にならぬようワークシートの記述の中の「制作の対象」と「選定の理由と制作のねらい」をことあるごとに確認しながら制作を進め作品の完成を目指して行く。

このような活動の結果生まれてきたのが、以下に示す作品である。作品①は与えられた角材を作品の台座として利用するパターン。造形的力量にある程度自信があり、粘土の扱いにもある程度の経験がある学生の作品である。作品②、③は対象となる動物の全体像を意識しながらも立方体を有効に使い、制作の際困難に思われるところをうまく仕舞い込んで表現している。作品④、⑤は動物の部分に注目し表現したものである。立方体に表現された部分はその動物らしさを端的に示す部分であり、立方体へのレイアウトを工夫することで、部分のみを見せながら唐突な印象から逃れ自然な印象を与えている。作品⑥、⑦は、粘土に他の素材を加えることにより、その動物らしさを表すことに成功している。粘土だけにこだわらず他の素材の力を借りることで、自分がイメージした表現内容に簡単にたどり着くことができている例である。作品⑧、⑨は、表現するためのアイデアを十分に練り上げることで、簡潔な粘土扱いにも関わらず制作者の表現意図を作品に表すことに成功しているものである。

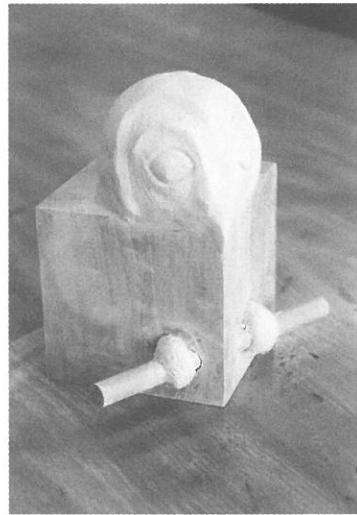
作品の鑑賞の際には、作者の制作意図や作品が完成するための様々な思考過程を推測することに重点を置く方法をとった。ワークシートを用いた導入によりこの課題のねらいを理解した学生達は、



作品①しろくま



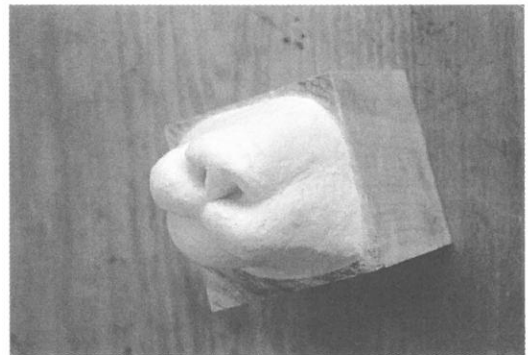
作品②キリン



作品③ふくろう

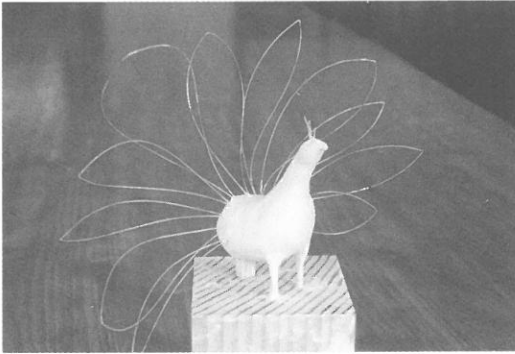


作品④ペリカン



作品⑤ライオン

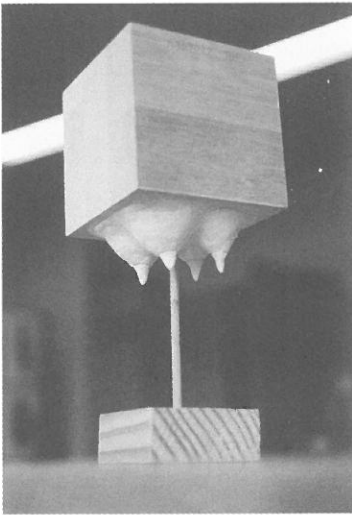




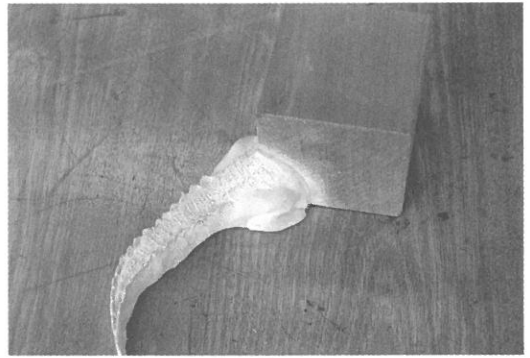
作品⑥クジャク



作品⑦マントヒヒ



作品⑧乳牛



作品⑨ワニ

これまでのような単に作品の善し悪しを見るような鑑賞態度から変化し、それぞれの作者の制作過程を追体験するような鑑賞態度に明らかに変化していることが見て取れた。このような態度、取り組みの変化は、子ども達作品を見る時、あるいは造形活動を指導して行く時の拠り所になる活動経験になったと考えられる。

## 5.考察

本学の造形関係の授業の中で「子どもの造形活動を追体験する」ということを念頭に試みてきたカリキュラムの様子を具体的に見てきたが、このような活動を体験することで得られる最大の成果は、活動に取り組む学生が意識の中に二つの視点を持てるようになったことである。一つは、まさ



にこの活動のねらいであるところの「子どもの造形活動を追体験する」という視点である。これは、造形表現体験の不足と言った今日の子ども達が抱える問題を解決するために、子どもが造形活動の中で行っている試行錯誤を学生自身が経験することがこの課題の目的であるということを明確に学生に伝えたことで、このような視点を学生が持つことが可能になったように思う。もう一つの視点は、子ども達が抱える造形表現に関わる問題を、学生本人が同じように持っていることを自覚し活動に取り組むという視点である。このような視点を持てるようになったのは、活動の過程を、①表現のための動機の発見、②制作のための資料収集、③表現形態と手法の検討、④作品の鑑賞、といった具体的な造形表現活動の段階として整理して示し経験させることで、あらためて自分の活動の中にある問題点をはっきりと意識できるようになったためであると言える。

今回のカリキュラムモデルを実施することで、本研究で取り上げた問題が解決するとは言えないかもしれない。実際、課題制作において学生たちが採った制作のための手法は、あらかじめ導入の際にこちらから提示した幾つかの手法の中から選んだものである。しかし、「具象的に表現することが難しいため抽象化する」とか、「表現困難な部分はブラックボックスに隠す」といったある意味で消極的に感じられる手法でも、“表現したい”とする内容にそうものであったり、デザイン的な美しい出来上がりを想定したりしたものであれば、作り上げられる作品は積極的で個性的表現を持つものとなって、表現したいことがきちんと他者に伝わる作品となることが実感されたはずである。

先に述べた二つの視点を同時に持ったうえで、このような活動を体験したことは、造形活動に関わる問題の所在を見つけることや、そうした問題を解決するための糸口を、自分が実際に経験したことから得ることが可能になり、根拠のある自信を持った援助活動につながっていくように考えられる。

## 6.おわりに

今日の子どもたちの抱える、表現力やコミュニケーション力不足という問題は、造形表現の分野以外でも非常に深刻な問題である。そしてそのような問題は、本学の学生たちのような年齢層の人たちの中に既に見られる問題であって、子どもたちに向けた解決策ばかりではなく、もっと上の年齢層に向けた解決策を模索し実施して行く必要があるものように思われる。

そのような大問題に対する解決策として、造形表現の活動が全て有効であるとは決して思わない。しかし、注意深く行われる造形活動は、体験の不足や、試行錯誤してもものを作り上げていく活動経験の不足の問題を浮き上がらせるとともに、その解決のためのヒントを示してくれる。繰り返し表現を試み、失敗の中から自分なりの解決方法を見つける力、自分の力量を見極め現実と折り合いを付けながらコミュニケーションを図る方法の獲得は、このような活動を繰り返すことによって身に付いていくものであるように思う。造形活動というものは単に作品を作るということ以上に“コミュニケーション力を高めること”や“理想と現実との折り合いの付け方を学ぶ”助けになるということを念頭に置き、広い視野を持って実践していかなくてはならないものであると考えている。

参考文献：

「子どもの思いをどう引き出すか」 花篤實 サクラクレパス出版部 1996年

「幼児造形—造形による子どもの育ち」 野村知子 ほか 保育出版社 2002年

「触覚表現に着目した造形表現の研究」

関崎哲 岡山県立大学短期大学部研究紀要第11巻 2004年

「見立てに着目した造形表現の研究」

関崎哲 岡山県立大学短期大学部研究紀要第12巻 2005年

（2006年10月31日受付）  
（2006年12月25日受理）